「わたし」の歴史、「わたしたち」の歴史
―色川大吉の「自分史」論を手がかりに

安岡健一（大阪大学）

「自国史」なるものを、その国の内側に生きている人は、いかに捉え、自らのものにしているだろうか。本報告では、1960 年代に民衆思想史という方法を通じてそれまでの戦後歴史学のあり方を問い直した色川大吉（1925-2021）が、1970 年代に提唱した「自分史」という方法を手がかりにして、歴史的なアイデンティティおよび学問と社会との関係について考察する。地域住民による生活を記録する実践から色川が抽出した「自分史」という問題系はどのようなものだったのか。また、その提起はその後どのような展開を見せたのか。色川以外の研究者や市民によって地域の歴史を掘り起こす事にもつながり、そこでは戦争経験が重要な主題となっていた。この成人した市民の歴史実践においては、公民館などを現場とする社会教育が重要な役割を果たしている。現代の日本では、「自分史」という言葉は、出版産業や、キャリア教育など様々な分野で取り上げられるなど、広範なひろがりを見せている。さらには個人の記憶を回顧することが持つ健康に及ぼす役割も注目されている。歴史学者の描く歴史と無縁のものとされがちな、個人が歴史を想起し書く営みについて、現代史における実態と可能性について取り上げ、今日における専門家の役割を捉え直す素材としたい。人びとの「歴史をつづる権利」を示したユネスコ「学習権宣言」がその導きの糸となる。

■安岡健一（やすおか・けんいち／YASUOKA, Kenichi）〉
2004 年京都大学農学部生物資源経済学科卒業。2006 年京都大学大学院農学研究科修士課程卒業。2009 年京都大学大学院農学研究科博士課程指導認定退学。京都大学博士（農学）。
現職は、大阪大学大学院人文学研究科准教授。
専門分野は日本近現代史、オーラルヒストリー。
主な著作：『「他者」たちの農業史』京都大学学術出版会、2014 年。「共に生きる「仲間」を目指して」髙谷幸編『多文化共生の実験室：大阪から考える』青弓社、2022 年。「聞き取り／オーラルヒストリー」岩城卓二ほか編『論点・日本史学』ミネルヴァ書房、2022 年 8 月。